る崖である。そのため、波が打ち寄せると石ころが転がる音が増幅され、「こおろこおろ」と不思議な音がするのだ。そしてそこからは、最初の攻略地であろう壱岐島（天比登都柱）が目の前によく見えるのである。

以上の点から、イザナギ神・イザナミ神が最初に降り立った島がオノゴロ島となっているのは、史実を神話化したものであり、オノゴロ島（＝小呂島と能古島）が壱岐・博多・糸島半島を制圧するうえで、両方とも重要な拠点となった可能性があることを指摘しておきたい。

さて、古事記の国産み神話の島について考察してきたが、古事記の島々が玄界灘に集中していることが事実であれば、いったいこのことがどんな意味をもつのか。

第一に、古事記（特に国産みのくだり）は創作の神話と考えられてきたが、これらの神話は国産みの時点から史実に基づいた歴史が反映された可能性が高いこと。

第二に、古事記は今上天皇の祖先が神であることを示す奈良時代の公式的文書であるから、事実として天皇家が古代から（本家・分家も含めて）、途切れることなく続いている可能性がたかまること。これは同時に、天皇家の祖先が対馬・韓国（おそらく弁韓のちの伽耶国や任那の地域）にあることをも示す可能性が高まること。

第三に、古代（弥生時代）において日本にはいくつかの文化的拠点（大型銅鐸生産地の近畿や四隅突出型墳丘墓の出雲、特殊器台分布の岡山）があるが、北部九州とくに福岡市近辺の文化的拠点（広型銅矛の生産地）が、天皇家本筋の祖先である可能性が高いこと。

第四に、魏志倭人伝にある女王卑弥呼がいた邪馬台国（正確には邪馬壹国）は、北部九州にあった可能性がたかまること（二世紀、倭国大乱を収め三〇カ国を連合させ大陸と交易を持った）。

○推論

1　国産み神話の冒頭、イザナミ神・イザナギ神が天の橋立から鉾をかき回して、オノゴロ島を造ったくだりから、最初の国産みが成功するまでの神話の原型は、渡来軍が壱岐・糸島・博多湾岸を武力制圧した史実を神話化したものである。その拠点は小呂島（於呂島または大蛇島）と能古島（能護嶋）であり、これが転じて淤能碁呂島（オノゴロジマ）となっただろう。

2　イザナミ神は神（子ども）を産んだあと小呂島で亡くなったのではないか。これを弔い、イザナミ神の祟を封じようとしたのが沖ノ島における宗像氏の祭祀の始まりであり、糸島二見ヶ浦における伊都国の太陽信仰（おそらく伊勢祭祀の原型）ではないか。

3　博多湾・玄界灘・糸島方面を制圧した後、渡来系王朝の天孫ニニギが伊都志摩に降臨し、本格的な国づくりが始まったのではないか。その版図は現糸島半島から前原、博多湾岸、高祖山～脊振山系であり、これが古代九州王朝の前身、**邪馬台（壹）国**と

4　渡来勢力侵攻（玄界灘攻防史）の伝説における、地名や神話が地方豪族へ転移（神話ゆずり）されたため、九州から西日本を中心に神話の故郷があるのではないか。地方豪族への神話の転移（神話ゆずり）は、圧倒的な武力だけでなく、圧倒的文化の力（神楽舞など）、文明の力（米の効率的生産・鉄の生産とその利用）を背景としたものであっただろう。

5　**邪馬台（壹）国**は、圧倒的な武力・文化・文明力を持ちながら、自らの建国神話を**制圧した地域**にゆずり（もしくは自国の神話の聖地を支配地域に指定することで）、その国を自らの支配下に組み込んでいき、ゆるやかな連合王朝である古代九州王朝を築き上げたのではないか。倭国大乱が卑弥呼によって収まったのは、この政治手法によるところが大きかったのではないか。

6　縄文系の土着民族は、小規模高地集落を築いていたが、弥生時代に入るとその痕跡はなくなってしまう。つまり、地方豪族（縄文系など）は、半ば自ら、武力・文化・文明力を享受するため、**邪馬台（壹）国**に吸収されていったのではないか。

7　古事記の元になった神話では、イザナミ神・イザナギ神による国産みで産まれた島々は、すべて元は北部九州圏内（玄界灘）の島々と考えられ、渡来勢力→九州王朝→大和王権と版図が拡大するにつれ（本家・分家も含めて）、島の追加や島名の拡大解釈、地方豪族への神話の転移（神話ゆずり）、同化がなされ、最後に**まつろわぬ神たちの**地方神話（**出雲神話や諏訪神など**）の取り込みがなされていったのではないか。（了）

淤能碁呂太郎（おのごろたろう）

・・福岡市在住　中学校理科教諭（四十二歳）昭和四十六年生まれ福岡教育大学特設地学科専攻　理科教育研究室卒業（平成七年）

大学の卒業旅行で韓国の学校を訪れ、小学生の「建国神話を教えてください」という質問に、神話に対する意識の違いに愕然とする。それ以後、古事記に興味を持つようになり独学で勉強中。

アーカイブコーナー

平成二一年七月特別例会「古代都市太宰府」太宰府市教育委員会井上信正氏による講演の概要を松中祐二氏がまとめたものです。（二〇〇九・九・二〇会報一四七号）

○政庁第Ⅰ期街区（条坊）は、七世紀末～八世紀初頭。政庁第Ⅱ期は、それ以降十世紀後半まで。それ以降が政庁第Ⅲ期と考えている。

○太宰府条坊の一区画は一辺約九〇ｍだった。

○太宰府都市計画は、まず条坊設計線の両側等距離に道路側溝を設けたため、設計線から割かれる道路幅によって隣接する宅地面積に差が生じた。

平城京も同じく宅地面積に差があり、平安京は宅地面積が一定に設計された。

○太宰府条坊は南北二十二条。左郭は十二坊だが、政庁Ⅱ・Ⅲ期のころ、右郭は八坊だったようだ。

●政庁設計基準と考えられる政庁中軸線と条坊推定ラインは東西方向で約五・九ｍ程度のズレがある。観世音寺では約三〇ｍのズレがある。

○小尺（唐尺）が採用されるのは七一三年からであり、それ以前は大尺（高麗尺）が使用された（編集注・異論もある）。

第Ⅱ期政庁は小尺、条坊は大尺が使用されたと考えて矛盾はない。

○条坊域の整地が政庁Ⅰ期に遡るものがある。

○九〇ｍ推定ライン上で検出される区画溝に、政庁Ⅰ期機能のものがある。

●条坊域の設計施工が先にあって、観世音寺・政庁Ⅱ期施設のほうが後で付加されたということが考えられる。

○右郭４坊付近にある通古賀地区中心の王城神社付近の小字地名は「扇屋敷」といい筑前国衙推定地であるが、その範囲と条坊区画は一致し、七世紀末の整地・遺物が比較的集中している。

○「扇屋敷」中心ライン（右郭四坊ライン）を南に延長すると、ちょうど基肄城の北端に位置する基山（標高四一四ｍ）頂上に至る。ここは基肄城の最高所で、条坊域から見ても基肄城で最も高く見える場所。

○平城京と下ツ道、恭仁京と奥春日山、平安京と船岡山など、都城は中軸線南延長線上のランドマークが設計基点となっている。

藤原京も中軸南に天武・持統陵や皇族陵墓が並び「聖なるライン」と呼ばれる。

●太宰府条坊の設計・造営と通古賀地区の関わりは意外に深いと考えられ、この地区が条坊創建時の中心領域と推定される。

○条坊中央付近に重要施設があるのは、宮殿を条坊中央に配置した大和の藤原京に構造が似ている。

井上氏による最重要知見は●印である。

①観世音寺より太宰府条坊の方が古いこと。

②創建当初の条坊設計は藤原京に近いものであったらしいこと。

さて、「二中歴」白鳳元年（六六一年）に「観世音寺東院造」とあること、観世音寺創建瓦の老司１式は川原寺と同時期とされ、それは天智期とされていること。「本朝世紀」に観世音寺本尊は百済（六六〇年滅亡）渡来とあることなどから、観世音寺創建は七世紀中期以前と考えられる。

となると太宰府条坊制はそれ以前ということになり、最古の都城とされる藤原京（六九四年）よりかなり古い条坊制ということになる。

つまり、太宰府条坊制は日本最古ということになる。

また、条坊制には、藤原京のように宮殿を中央に配した「周礼」考工記の基準に基づく周礼形式（仮称）と、平城京のように宮殿を北辺中央に配し、北魏代から採用された北朝形式（仮称）とがある。

したがって創建当初の太宰府条坊制は周礼形式で、太宰府政庁Ⅰ期以降は北朝形式ということになろう。

井上氏によると、時代順は条坊→観世音寺・政庁Ⅱ期と指摘している。

しかしさらに推考するなら、創建当初が周礼形式だったなら、周礼形式条坊→政庁Ⅰ期→政庁Ⅱ期と考えるのが自然であろう。

このうち政庁Ⅰ期と観世音寺の時間的関係が不明であるが、もし政庁Ⅰ期の方が古いか、少なくとも両者が同時期だとしても、太宰府条坊創建時は七世紀中期よりさらに恐ろしく古くなる可能性もある。

この時代、すでに中国・朝鮮には多数の条坊制が存在していたが、すべて首都にしか造営されていない。（唐代洛陽にも造営されたが、ここは過去首都であった時代に既に条坊制は造営されていたし、唐代においても副都であった）

条坊制とは王城都市に見られる都市プランなのである。

もし大和政権が九州を支配していたのなら、大和をさしおいて、先に九州に条坊制を造営するということがあるだろうか。

太宰府条坊制は通説で解釈することは不能であり、日本古代史を根底から覆す可能性を秘めるものかもしれない。

なお、井上氏の報告については、ニュース№１４４の「（太宰府）日本最古の条坊制都城」でも概要が書かれていますので参照願いたい。（松中祐二）

この「一語とあの「一文の罪⑪

前田　和子

楽天の田中将大が野球記録を塗り替えた日、考古学者の森浩一氏が逝った。しばらくして、民俗学者の谷川健一氏の訃報を知った。また一人、また一人と歴史のおかしさを軌道修正してくれる人たちが居なくなる。寂しいよりも悔しい思いである。

とりわけ二年前にお会いした、車椅子の森浩一氏の、目の輝きを今でも覚えている。その後の田中将大が、負けない今季二十四連勝で、楽天のパ・リーグ優勝へと導くことは御承知のとおりである。

しかし彼を想う時、あの夏の甲子園がいつも甦る。ハンカチ王子と呼ばれた、現日本ハムの斉藤佑樹と投げ合った場面である。あの日あの時、二人はプロという道へのスタートラインでは、人気・実力共に互角であったと思う。しかし、互角のスタートラインにいたはずのもう一人は、近頃はほとんど表舞台に登場しない。

そんなことを考えていると、考古学者と言われる人達のスタートラインが、どこにあって今があるのだろうと思ってしまう。

森浩一氏の、「考古学は町人の学問である。」として、事実に忠実で反骨精神の塊の様な学者もいれば、その一方で寄